

書き取り 毎分280字

お仕事 日本遺産

1

速記者 瀬尾真菜さん(24)



シャープペンシルと半分折った書道半紙。これが日本の速記者の基本スタイルだ。東京都港区、西田裕樹撮影

国内に「プロ」約500人

日本速記協会によると、速記を職業とする人は約500人。主に協会が実施する速記技能検定の1級(1分間に320字の速さの朗読を書き取れる)や2級(同280字)に合格した人が、「プロ」として活動している。

ただ、年4回実施の検定の受検者(1~6級)は1969年度の9175人をピークに減り続け、2014年度は489人。

日本で速記が普及したのは1882年、日本語速記術の創始者の田鎖綱紀が初の講習会を開いたのがきっかけ。1918年には貴族院と衆院に速記者養成所ができ、第1回帝国議会から現在まで国会の議事録が残るのは、先進国でも異例だ。同協会の河村恵子事務局局長は「日本の民主主義を支えた速記を残し、後世に伝えていきたい」と話す。

「困」は、小文字「O」と書く。相手が話す内容を独特の文字を使い素早く書きとめるのが、速記者の仕事だ。国会や裁判などで欠かせない存在だったが、録音機器の普及で今では存続の危機にある。しかし、130年の歴史を持つ日本の速記を受け継ごうとする若い世代もいる。

創業60周年の老舗速記会社「大和速記情報センター」(東京)で、入社5年目の瀬尾真菜さん(24)もその一人だ。同社に55人いる速記者の9割を女性が占める。1分間で280字書きとれる瀬尾さんは、アナウンサーが読むニュースは漏らさず速記できる。「カラオケで友達が歌う歌詞を書きとっていくと、みんな驚いてくれます」と笑う。仕事の現場は、自治体の

議会や株主総会、雑誌のインタビュー、講演など、議会の場合、市長や議員の名前を頭に入れ、過去の議事録も読み込む事前の準備が欠かせない。録音機器を回し、速記文字で書きとると同時に、次にだれが発言しようか、目を光らせる。会社に戻って自分の書いた速記を録音と

照らし合わせ、議事録にするのも速記者の仕事だ。「さまざまな分野の話をいち早く聞けることが速記の魅力。好きな芸能人のインタビューにも立ち会えた」と話す。最も印象に残った仕事は、小沢一郎・衆院議員のインタビューだ。「オーラがすごかった」という。

話聞くの好きだから

高校3年の時、友達に連れられ、早稲田速記医療福祉専門学校(東京)を見学した。速記の実演を見て「人の話を聞くのが好きな自分にしてそこに速記文字を練習し

ていた」。

独り立ちした今は、夕方までは議会や夜は講演会など、掛け持ちで仕事をすることもある。集中力を持続しなければならない分、疲れも

判断力 機械は及ばぬ

発音の最大9割を自動的に文字に変換できる「音声認識システム」が開発され、速記者を置かない議会も増えた。国会にあった速記者養成所も、2006年度に閉鎖された。今では速記者を養成する学校は事実上、母校の専門学校だけだ。それでも機械は速記には追いつけない。まず、方言

どつと出る。息抜きに映画をみても、俳優の言葉が脳内で速記文字に変換され、リラックスできない。歌詞のないインストゥルメンタルを聴く方が、心が安らぐ。「話し言葉を文字にするという需要がある限り、速記の仕事はなくなる」と瀬尾さん。結婚、出産後も続けるつもりだ。(堀口元)

やはっきりしない言葉があるに変換率が下がる。マイクから離れたところでのヤジや、複数の発言が同時にあった場合、速記者がいればすぐに確かめたい部分を起せるが、機械だとそう

「お仕事 日本遺産 1」
朝日新聞二〇一五年一月九日 朝刊 二八頁
朝日新聞社掲載承諾済み 無断転載禁止